



編集後記

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-06-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 住友, 陽文 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/12844

編集後記

人間にできて神にできないこととは何か？

それは、死ぬということだ。生物学の高木由臣さん（奈良女子大学名誉教授）は、寿命がない原核生物（バクテリアなど）に対して寿命のある真核生物（ほとんどの生物はこれ）が死ぬというのは一つの能力であると述べる。

原核生物は微生物によって食われなければ、無限に増殖し続ける。死ぬことはない。それに対して真核生物は、基本的に有性生殖で両性の遺伝子が組み合わせあって子孫を増やす。細胞分裂は一定のところでストップし、無限に体が大きくなることはない。さまざまな機能を含有した細胞は成長の過程でその多くの機能を欠如させ、そのヴァリエーションで体の諸器官を構成する。だからそれぞれの生物の個体には個性やアイデンティティが備わる。またこの生物にはたった1つの例外もなく、必ず死が訪れる。いわば、原核生物は暴走系であり、真核生物は抑制系である。つまり細胞分裂が一定のところでストップしたり、または細胞が死んだり、はたまた生物の個体が死んだりするのは、この抑制系の機能が効いているからだ。細胞の個体死によって、細胞総体、すなわちカラダ全体が生きていける。全体生のために個体死がある。そういう意味では、原子力やiPS細胞というのは暴走系と言える。

そんな話のある研究会で高木さんから聴く機会に恵まれた。とてもおもしろかった。そこで、ふとナショナリズムは普段は抑制系ではないかと思った。「かの地はわが国土にあらず」と観念するナショナリズムがあるからこそ、国民国家という領域において無用の膨脹が抑えられているのではないか。また、「個体（個人）は死んでいいのだ。そのお陰で全体（民族や国家）が生き延びるのだから」という語りはまさにナショナリズム的だ。しかし、人間の欲望や衝動は時に暴走する。つまり抑制系としてのナショナリズムはある瞬間暴走系に変化し、他国を侵犯していく。近代国家は、それゆえ国家自らを制約するさまざまな原理を手に入れた。立憲主義はその一つだ。三権分立のもと「法の支配」によって、国家の諸機関を制限することを通して主権それ自体は制約される。

ところが、このような近代の普遍原理たる立憲主義や、はたまた基本的人権を捨て去ろうとする憲法改正案が、戦後最も長く政権を担当してきた政党から発表され、そのような憲法改正を謳う人物が首相になった。かつて近代批判は知的世界のトレンドであった。しかし現在では保守政党の主張するところともなった。近代が政権によって捨て去られようとするとき、果たしてかつての近代批判の担い手たちはそれを礼賛するのか、または危機感を強めて批判をするのか。批判する時、かつての近代批判の看板はどのように書き換えられているのだろうか。そんなことを考えながら、編集作業を行っていた。

とにかく8号をお届けします。どうぞご味読下さい（文責住友陽文）